

くれあ通信 9月号

シリコンバレーはまさに日進月歩。先月書いたように、情報産業の技術革新は日夜行われています。特にこのエリアはそれが盛んで、住んでいる人たちはみんなIT技術に関心を示しています。iPhoneを始めとしたスマートフォンやタブレットPCの利用者が非常に多いこともそれを象徴しており、全米でもその割合は偏っているとのことでした。

新聞・テレビを始めとするメディアでも、日々技術ニュースを伝達しているのも一つの特徴です。次期WindowsであるWindows 8のファースト・ルックを現地ニュースで流しているのを見ました。今のWindowsは、iPadのようなインターフェイスを備えるようで、オブジェクトが指の操作により滑らかに動いています。現状、ビジネスではそうしたインターフェイスは必要ありませんが、コンピュータのベクトルはキーボードやマウスから離れていくことは間違いなく、より人間の感覚や思考に寄っていくようです。

さらに興味深いことに、Googleは自身の会社がある市全域に対しWiFiを提供しているとのこと。ITへの依存度は留まることを知らない、そんな印象でした。

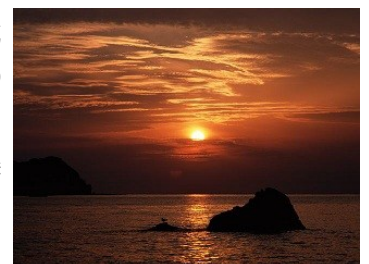


朝霞紹介



8月6日、7日に、予定通り朝霞市夏の恒例行事である「彩夏祭」が行われました。今年は震災の影響により自粛ムードもありましたが、若干の規模縮小に留まり、「とどけよう元気を朝霞から」の言葉のもと、元気いっぱいの楽しい夏祭りとなりました。恒例の花火も例年より1時間前倒しとなったものの、規模は例年以上と言えるほど活気あふれるものでした。今年は近隣の祭事自粛もある中で開催でしたので、近郊はもとより各方面から多くの方がお祭りを見に来られたのではないかと思います。そんなかたが

たに少しでも元気が届いたのならば、このお祭りは大成功だったと思います。今年も昨年ほどではないにしろ厳しい暑さでした。また、7日の夕方には激しい雷雨もありました。ですが、鳴子をはじめとする各イベントも成功裏に終わり、本当に充実した楽しく素晴らしいひとときでした。



映画紹介

『浮雲』

大女優・高峰秀子さんが昨年未84歳でこの世を去りました。今年はその追悼としてフィルムセンターなどで主演作を上映しています。彼女の数ある代表作の中でもひとときわ輝いていると思われる一本が『浮雲』です。名匠・成瀬巳喜男監督が撮りあげた、美しくもせつない悲哀あふれる作品です。高峰秀子扮するゆき子の心情が画面いっぱいに映し出され、それに翻弄される森雅之扮する富岡を愛らしくさえ感じてしまうこの作品は、人と人の運命の重さ

とはかなさを同時に知らしめる大人の物語です。両者の演技の素晴らしさもさることながら、巧みな空間演出で二人の距離を絶妙に画面に切り取る演出には溜息さえ覚えます。日本の風情も同時に体感できる、本当に素敵な一本です。

浮雲
昭和30年
1955

Director: 成瀬巳喜男
Writer: 水木洋子
Cast: 高峰秀子
森雅之



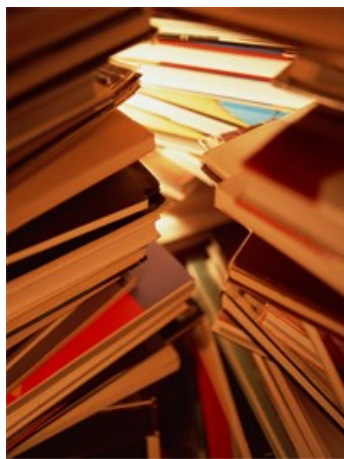
書籍紹介

『アナン』 飯田 譲治・梓 河人

ホームレスの男と拾われた少年一。運命の絆で結ばれたふたりのまわりで不可思議な現象が起こり始める

原作を飯田氏が、文章を梓氏が担当する名コンビの作品であり、ドラマにもなった「ギフト」「アナザヘブン」が有名です。特に全作通じてユーモア溢れる魅力的な文章が印象的なのですが、梓氏だけで書いた本がそれほど面白くないところが、逆に本当にいいコンビなのだなと実感するところです。本作はスピリチュアル・ファンタジー

という聞いただけで遠ざかりたくなるジャンルに分類されるようですが、そんなものは超越して、この本はおもしろいです。楽しく読み、感情が揺さぶられ、読後には幸せな気持ちになる、小説のフルコースとでも言えるような作品です。本作は2001年発行で、文庫版が2006年に発行されておりますが、文庫版では物語の中で大事だと思われる部分が削られています。飯田氏は文庫版の後書きで作品が成長したとか書いていますが、ただ検閲されただけだと思います。是非ハードカバーで読んでいただきたいですね。



Crea

コンピューターソフトウェアの企画、開発なら株式会社クレアへ